

ライブラリー・スペシャリストとの出会い

教育学部助教授

高倉 良一

研究者の道を志してから、10数年の歳月が過ぎた。この間、さまざまな図書館を訪ねる機会に恵まれた。学部生の時に利用した九州大学の中央図書館、大学院生の時、その文献の多さに感謝した九州大学法学部の図書館、帰省した時に活用した鹿児島大学の図書館、上京した折りに通う国会図書館や東京大学の外国法文献センター、私立大学では、早稲田大学法学部の図書館など、いずれも青春時代の一時を過ごした図書館だけに多くの思い出がある。

しかし、私の人生に最も影響を与えた図書館は、これら大規模な図書館ではない。私が訪れた図書館の中では最も蔵書数の少ない、福岡のアメリカン・センターの図書館である。

アメリカン・センターの図書館に、初めて入った時の感動、それは、私がアメリカと直接対峙した感動であった。部屋のデザインは、いかにも70年代のアメリカらしく、モダンでかつ斬新なものだった。部屋の中央は中2階となっており、決して広いとはいえない部屋が、極めて機能的にアレンジされていた。

そこでは、アメリカで発行されている最新の雑誌や書籍が、開架式の本棚に収められ、自由に手に取ることができるようになっていた。また、合衆国議会の資料は、議会での討論はもちろん、各種委員会の公聴会の内容まで、マイクロフィルムに収められ、容易に見ることができ、アメリカ民主主義の真骨頂を見る思いがしたものである。

ビデオやテープなどの映像や音声の情報も豊富に備えられ、その場で視聴できる設備が整えられていた。今でこそ、日本の図書館でも、ビデオ・ライブラリーが設置されているが、当時、福岡にある図書館で、この設備があったのはアメリカン・センターだけであったと思う。それだけに、びっくりしたものである。

さて、このアメリカン・センターの図書館が、私の人生に大きな影響を与えたのは、決して、このようなハードの側面だけではない。私は、この図書館で、研究者人生の出発を暖かく見守ってく

れた川上繁治氏に出会ったのである。

アメリカン・センターで、レファレンスの仕事に携わっておられた川上氏は、駆け出しの大学院生に、とても親切に、図書の検索方法や各種文献目録の使い方を教えてくれた。文献の検索は、研究者にとって最も基礎的な作業であるが、それまで、大学や大学院で、系統的に検索方法を教えてもらう機会がなく、検索の具体的な知識や技術に乏しかった私にとって、氏の存在は、いわば砂漠でオアシスに出会ったようなものであった。

図書館の優秀な水先案内人ともいべき氏は、人間的な交流を大切にされる方でもあった。ユーモアに富んだ会話を好まれたばかりか、未熟な研究者の卵が直面する数々の悩みに関しても、目から鱗が落ちるような適切な助言をして下さることが常であった。

図書館を、単なる文献の保管場所から、人間との出会いの広場に変え、研究に従事しようとする者を育ててくれた存在、それが、川上氏であった。

氏の名刺には、ライブラリー・スペシャリストと書かれていた。

魅力ある図書館を

農学部大学院細胞資源科学研究科

澤村 豊

木造の古い洋風の建物で、細長い階段を昇ると、その重さからか何かしらの雰囲気からか、小さな子供には少し開けにくい位の大きな扉があり「えい。」と開ける姉の後を付いて行くとの外の世界とは違って薄暗く、冷んやりと静かで全く手の届きそうもない高い棚にまで本が置いてあり「しいー。」と言う姉の口元の人差し指に少し緊張したのを憶えている。これは姉に手を引かれて初めて行った町の図書館の思い出で、その後何度も行って音楽家の伝記だの、変わった病気の本だの、UFOの本だのを讀んだのを憶えている。この後少ししてから図書館は建て替えられ、少し遠くなって町の公民館の近代的な鉄筋の建物の中に組み込まれて、新しい明るいその景色に、今までの重厚なイメージと違うものを感じ、どちらかと言えば子供向けとなったその図書館を、子供ながらに嫌って余り通わなくなった。

また浪人のときに使っていた図書館は、その時

の自分自身の心持ちも反映していたのであろうが、適度な緊張感には何かしら心地良いものを感じ、その中にはじぶんの勉強がはかどった様に思う。また私は幾つか良い雰囲気を持った図書館を知っている。そしてこの雰囲気こそが図書館の本当に重要なものでないかと思うときがある。コンピューターシステムの導入や蔵書の増加も、それは全く素晴らしいことで、その便利さも図書館の大きな要因の一つである。しかし人が利用する空間であるのだから便利さだけを追求せず、人の気持ちや心を忘れたくない様に思う。魅力のある図書館なら蔵書量がたとえ少なくても、そこに自分の本を持ちこんで読みに行くであろうし、快適に読めるであろう。しかしながら、この雰囲気というか空気は、図書館の管理者側だけが作り出していくものではない。例えば、図書館に流れる適度な緊張感を利用する側が作り出していくものであろう。いくら器や中身が良いものであっても、使う側が台なしにしてしまう事も有り得る。そういう意味で図書館は決して出来上がった物では無く育てて行くものであろう。試験期間以外は比較的すいている図書館は人を引き付ける何かが少ないのではないかと思う。私はこの大学に魅力ある図書館を育てて欲しいし、育てたいし、育てるべきであると思う。全く漠然とした願いであるかも知れないが本当にそう思う。魅力のある図書館を育てることが、結局は魅力のある大学を育てることになり、そしてこの魅力ある大学で育つことによって、魅力のある人間に少しは成れるのではないかと思う。

「三国志」の楽しみ方

経済学部3年

林 富士雄

最近、身の回りでやたらと「三国志」と言う言葉を見かけます。いわゆる「三国志ブーム」です。アニメやゲームや映画があり、本屋では三国志関係の本で一コーナーを形成しています。しかし三国志と言う名は知っていても、内容は知らないと言う人も大勢います。そこで、この機会に三国志へのアプローチの仕方を僕なりに書いてみたいと思います。

まず「三国志」とは、中国の後漢末期から、その後の晋による統一までの動乱の時代を書いた話

です。そして三国志は一般に「正史三国志」と「三国志演義」とに分かれており、前者は中国の正史であり、後者は小説です。一般によく読まれているのは後者の方です。この演義は、三国の中で蜀を中心に書かれており、有名な諸葛孔明が神様のような活躍をし、大変ドラマティックに描かれています。

さて、一般に中国の本を初めて読む人が直面する問題は、普通の本より難しい漢字が多い事と、個々の人名がけっこう似ているので覚えにくいという事です。このために混乱してイヤになる人が多くいます。そこでこれら进行けるには、第一に漫画(コミックス)を推したいと思います。漫画なら、ある意味では「百聞は一見に如かず」?のような感じで、比較的わかりやすく話のイメージが頭に入り、かつ楽しく読めます。漫画で三国志の広大さと中国の人名と漢字に慣れたところで、小説を読むとよくわかると思います。小説は吉川英治の三国志がポピュラーで、演義を中心に書かれているので読みやすく、楽しめると思います。この小説を読み終える頃には、自分なりに三国志のおもしろさがわかると思います。それから個人意志で楽しむと良いと思います。

次に、簡単に三国志の楽しみ方の応用を書いてみたいと思います。まず歴史というものは、過去からの積み重ねなので、三国志の中にも当然、戦略や思想や文化の面に過去の歴史が大きく反映されています。ゆえに、過去の歴史を知らなくては、三国志のおもしろさは半減してしまいます。特に三国志には「春秋戦国時代」が大きく影響しているので、この時代について書かれた本(例えば春秋左氏伝や戦国策など)を読んでおくと、より良く三国志の奥の深さを楽しむことができます。また老子や孔子、そして漢代の清流派知識人などの考え方や武経七書を読むなどして、三国志を構成する様々な要素を良く知った上で、まともに正史三国志を熟読すると、「三国志」はただの小説以上の何かになると思います。

以上、簡単にですが、僕なりの三国志の楽しみ方を書いてみました。これら三国志関係の本は、図書館に数多くありますので、大いに利用すると良いと思います。そしてこの夏、涼しい図書館で三国志を読んでみるのも良いのではないのでしょうか。